体験を生かして「同情」を考える

加古川市立平岡南中学校　一年　久留宮　正悟

僕は生まれつき左目が左に動きません。けれど今まで別に不自由に思ったことは一度もなくて、特に気にすることもありませんでした。

ここでみなさんに質問です。体に不自由なところがある人や、障害がある人に対してそれをかわいそうとか気の毒だなと思って同情してくれる人と、特に気にすることもなく普通に接してくれる人では、どちらがその人を気遣うことが出来る人だと思いますか。

一般的に考えると同情してくれる人のほうが気遣うことが出来るように思う人が多いと思いますが、僕はそうだとは思いません。何故そうだとは思わないかというと、僕がまだ小学生だったころに、友達に「目のやつしてよ。」と言われることがありました。「目のやつ」とは視線を左にずらすことで、左目は左に動かないのでまっすぐ向いたままで、右目だけ左に動いたようになることです。そのころは相手がびっくりするのがおもしろかったし、別にそうすることが嫌ではなかったので、よくやることがありました。けれど、その様子を見てやってきた別の友達が「その目、生まれつきらしいで。かわいそうやからそんなん言うのやめとき。」と言いました。その言葉を隣で聞いていた僕は自分をかばおうとしてくれているとありがたく感じました。しかし一方では複雑な気持ちにもなりました。その言葉は正しいことを言っているように聞こえるけれど、何か引っかかるようなものがあって、「ありがとう」と言うべきなんだと思ったけれど、何故だか言うことが出来ませんでした。その出来事をしばらくたって振り返ってみると、あの時引っかかったり、「ありがとう」と言えなかったのはきっと「かわいそう」という言葉が嫌だったからなのかなと思うようになりました。それから何故嫌だったのかを深く考えてみると、それは「かわいそう」と決めつけられていたからだと思うようになりました。僕はこの目のことを不自由に思ったことはないし、特に気にすることもなかったのに、その人の思い込みで「かわいそう」と決めつけられて嫌な気持ちになったので、僕は決めつけるのはよくないと思いました。

夏休みに入ってすぐに障害者施設でたくさんの障害者が殺傷されるという悲しい事件がありました。その事件の容疑者は「重複障害者が生きていくのは不幸だ。不幸を減らすためにやった。」、「障害者は生きていてもしょうがない。」などと供述していました。それを聞いて、僕はそんなことを言うなんてとても信じられませんでした。本当に勝手な思い込みだなと思いました。被害者の家族は絶対に生きていて不幸だなんて思ってないだろうし、ましてや生きていてほしくないなんて思ってもいないだろうからこんな風に考える人が一人でも少なくなってくれたらいいなと本当に思いました。そのためには

もっと一人一人が命の大切さを知ることと、相手の気持ちになって考える思いやりの心を高めていかないといけないと思います。そうすれば命をむだにしたり、命をなくそうと考える人も少なくなると思うし、障害がある人もない人も、もっと笑顔で暮らしていける人が多くなると思います。

僕は体に不自由なところがある人や障害がある人に対しての言葉のかけ方や考え方は、相手の立場を思いやることが大事だと思います。それは言葉をかける人と受ける人で感じ方が違う場合があるからです。もしかしたらその人はどこか不自由なところがあっても生まれつきそうだったら、「これはこういうものだ」と思っていて、不自由と思っていないかもしれないということです。別に不自由だと思っていない人が「かわいそう」とか「不幸」と言われると、せっかく心配してくれていても逆に嫌な気持ちになるかもしれないということです。でも、心配してくれることは自分を思いやってくれているということなのでやっぱりうれしいことだと思います。僕は自分のこの経験を生かして、体に不自由なところがあったり障害があったりする人に対して、その人は「不幸」だとか、「かわいそう」と決めつけずに普通に接するようにすることが、本当に相手のことを考えていると思います。

「同情」は相手のことをいたわる、思いやるという意味の言葉です。しかし、反対に同情は相手をかわいそうと決めつけることになってしまう場合があります。相手を思いやるように見えて実は対等ではなく少し差別のような考えがひそんでいると思います。僕は障害も含めてそれぞれが持っている個性と考え、お互いに認め合い、気にすることもなく、共に支え合う人間関係を築いていきたいです。